

研究ノート

「アダム・スミスの価値尺度論」についての
海外における諸研究(8)

—1960年代(その2 : A.K.ダース・グプタ) —

中 川 栄 治

序

わたくしは、主に今世紀に入ってから海外において発表されてきた「アダム・スミスの価値尺度論」に関する諸研究を整理する試みの一環として、本誌第4巻第1、第2、第3、第4号において、それぞれ、19世紀末から1910年代、1920年代、1930年代、1940年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みを、また、本誌第5巻第2および第3号において1950年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みをなし、そしてそれについて、本誌第6巻第1号では1960年代に海外において発表された諸研究の一部としてE.ホイッテーカー、W.フェルナー、O.H.テイラーの研究の内容を整理する試みをなした。本稿は前稿にひきつづいて1960年代に海外において発表されかつわたくしがみることのできた「アダム・スミスの価値尺度論」に関する個々の研究の内容を整理しようとするものであり、ここでは、1960年および1961年に発表されたA.K.ダース・グプタの所論の整理が試みられる。

A. K. ダース・グプタ (1960, 1961)

ダース・グプタは、1960年に発表された彼の論文において、スミスの価値分析における主要な関心は価値の尺度を見出すことにあったのであって、ある程度の一般性をもった説明的な仮説としての価値についてのある

一般的な「理論」を提示することにあつたのではなく、生産費アプローチでさえ、ある限られた意味ではひとつの理論とみなされるけれども、ひとつの社会的事象としての価値を説明することを意図されてはいなかった、ということ、また、「価値理論」(theory of value)は、スミスの経済分析体系にとっては補足的なものにすぎない、つまり、「価値理論」は、リカードウの体系や新古典派の体系の核心を構成しているようには、スミスの体系の核心を構成してはいない、ということ、示そうとするのである¹⁾が、ダース・グプタは、価値尺度についてのスミスの議論に関連して以下のような諸点を指摘している。

①スミスは、「使用価値」と「交換価値」という二つの価値概念があると述べる。前者は商品の「効用」を表わし、後者はその商品がもつ「他財貨を購買する力」を表わす。スミスの経済学の題材を構成するのはこの「交換価値」である²⁾。また、スミスによればこの「交換価値」は、測定可能な数量であつて、たんなる比率といったものではなかつたのであり、そして、彼が価値に関する議論において主に努力をかたむけたのはこれの尺度の発見³⁾ということであつたのである。

②ところでスミスは、「交換」価値を、「その対象物の所有から生じる他の財貨にたいする購買力」と定義するのであるが(W. N., p. 28. 大河内訳 < I >, 50ページ。), この意味でのXの価値は、Xが市場で購買することのできるY, Z等々の数量である。したがって、その価値は、それが交換されるすべての他の商品のタームで測定されうるのである。では、これらの他の諸商品は、それ自体が不変なものであるところのある共通の標準^{スタンダード}でまとめられうるのか。そのような標準が存在しなかつたら、すべての特定の商品は、その商品が購買できるところの他の諸商品が存在するのと同じだけの数の諸価値をもつこととなるであろう。このような考慮から、スミスは、「支配労働尺度」へと導かれるのである⁴⁾。

③しかし、何故に、労働なのか。標準としてなにか他の商品が選ばれえなかつたのか。スミスは、とくに金、銀および穀物の、価値尺度としての

資格を考える、しかし、それらはそれらの価値において変化し、そして時にはヨリ安価でありまた時にはヨリ高価であるということを知る。またスミスによれば、労働もまた、ヨリ多くの量の他財貨を購買したりヨリ少ない量の他財貨を購買したりするかもしれない、「だが、変動するのは、それらの財貨の価値であって、それらを購買する労働の価値ではないのである。」労働は、労働者が「彼の健康、体力、精神が普通の状態に」ありまた「彼の熟練と技能が通常程度に」あるかぎりにおいては、「彼の安楽、自由、幸福」の犠牲というタームで、労働者にとってある不変の価値を保持する、と考えられるのである。「それゆえ労働だけが、それ自身の価値がけっして変動することのないために、すべての商品の価値を、時と場所のいかんを問わず、評価し比較することのできる究極で真の標準である。」(W. N., p. 33. 大河内訳< I >, 57-58ページ。傍点の付されている箇所は、ダース・グプタがイタリック体にしてある箇所。)とされるのである。⁵⁾なお、スミスは、「労苦と骨折り」ということに言及している。これはしばしば、スミスの体系における価値へのある独立したアプローチとみなされる。⁶⁾しかし、この「労苦と骨折り」というのは、うえてみたような主観的なタームでの労働という概念を明瞭にするために使用された一つの表現にすぎないのであって、「労苦と骨折り」をもってスミス自身は価値についての一つの独立した説明としようとしたのではなく、それは、価値尺度としての「支配労働」という基本的概念を根拠づけるために用いられた補助物なのである。⁷⁾

④さて、以上のように商品の価値とは測定可能な数量であり、そしてその尺度はその商品が交換において支配する労働にあるとしよう。ではその場合に、どのようにして、「名目価格」(貨幣での価格、貨幣価格)を「真実価格」(<交換>価値)へ転換するのか。この問題に対する解答が、スミスの価値分析のもっとも重要な局面を構成するのであり、そしてその解答は事実上つぎのようなものであるといえる。すなわち、いま w を当該商品に体化された労働量にたいして支払われる総賃金、 \bar{w} を労働1単位当りの賃金、さらに、 r と p を、それぞれ当該商品を生産するにさいして

の土地および資本の使用にたいして支払われる地代および利潤を、表わすとすれば、土地の占有と資本の蓄積にさきだつ「初期未開の社会状態」では $\frac{w}{\bar{w}}$ によって、土地の占有と資本の蓄積の行われる進歩した社会では $\frac{(w+r+p)}{\bar{w}}$ によって、それぞれ、当該商品によって支配される労働の量、すなわち、当該商品の「⁸⁾ 真実価格」、交換価値が表わされる、といったものである。

⑤「貨幣での価格」の「労働での価格」へのこの後者の転換原理は、完全に一般的な原理であり、個々の商品に適用しうると同じように全体としての産業にも適用することができる。そして、この原理がスミスの体系において意義をもつのは、まさしくこの広範な——全体としての産業の広さにまでの——適用ということである。スミスは個々の商品の価値から始めているけれども、彼は実際、ついには全体としての諸商品の価値にまで進んでいる。⁹⁾ ここにおいてもまた、社会の年々の生産物の一部を地主や資本家が受け取り、一部分のみが労働者のもとへ帰属するかぎり、全体としての財貨によって支配される総労働は、それらの財貨を生産するのに費やされる総労働を超過する。いま、 W で全体としてのその経済にとっての総賃金を、 R で総地代を、 P で総利潤を表わすとすれば、労働支配尺度の公式は、 $\frac{(W+R+P)}{\bar{w}}$ ということになる。ところで、総賃金、総地代、総利潤の合計 ($W+R+P$) は、要素費用表示の国民所得として知られているものである。したがって、この拡大された公式 $\frac{(W+R+P)}{\bar{w}}$ は、労働のタームで国民所得を測るもの、あるいはケインズ流にえば「賃金単位」のタームで国民所得を測るもの以外の何物でもないのである。¹⁰⁾

⑥ところで、価値分析のコンテキストにおけるスミスの主要な関心は、価値尺度を見出すこと、すなわち、一商品の価値の尺度を発見したそれからすすんで諸国民の富の尺度を発見することにあつたのであって、一般的な価値理論を提供するというものではなかつた、価値についての他の諸概念は付随的なものにすぎないのであって、それらの諸概念の意義は、尺度という主要問題との関連でみられるべきである、このことはスミスの

う「労苦と骨折り」についてと同様スミスの生産費アプローチについてもいえるのであり、そしてスミスはこの尺度を労働に見出したのであった。¹¹⁾

⑦なお、スミスのこの労働尺度は、シュムペーターの考えているようにワルラスの体系にあらわれるニューメレールという概念の先駆的なものであるわけではない。¹²⁾ スミスの労働尺度とワルラスのニューメレールは表面的には類似しているけれども、それらは同一の含意も同一種類の意義も持たないのである。¹³⁾

⑧スミスの支配労働価値尺度は、経済成長ということを中心的な問題として取り扱う『国富論』において、集計にかかわる問題に対するスミスの方法という意義をもつのであり、そしてそれはそのような意味で、スミスの体系においては、経済的变化のプロセスについてのひとつの理解への鍵を提供するのである。¹⁴⁾

＜補記 1＞

ダース・グプタによればスミスの支配労働尺度は以上のようなものとして理解されるのであるが、ダース・グプタは、そのようなものとしての支配労働尺度を用いてスミスの議論における経済進歩を説明しようとしている。ダース・グプタの説明の要旨は以下のようなものである。

産業の収入がその時々によりられるその生産的使用の大きさしだいで、一経済は成長的であったり、停滞的であったり、あるいは衰退的であったりする。ところで、一社会の人口は年々増加する傾向をもつゆえ、もし年々の産出高の適当な部分が余剰の労働を生産的に雇用することへと向けられるとすれば、ますます多くの労働量にたいする支配力を手に入れるためのしたがってまた進歩のための余地が、つねに存在することとなる。¹⁵⁾ このことを前で見たと式を用いて説明すればつぎのようになる。いま、 \bar{w} が経時的に一定に留まる、たとえば、生存費水準に留まる、と仮定しよう。¹⁶⁾ また、ある所与の期間 (t_0) のあいだに雇用される労働量は $\frac{W}{\bar{w}}$ であるとしよう。その場合、その結果として生じてくるその期間における価値タームでの産

出高は、 $\frac{W}{\bar{w}}$ よりも大きな $\frac{(W+R+P)}{\bar{w}}$ であるであろう。その産出高によって支配される労働はその産出高に体化された労働よりも大きいのである。さて、もし次の期間 (t_1) において産業の全収入 ($W+R+P$) が「生産的労働」の雇用にすなわち資本の形成に向けられるならば、そのときには明らかに、期間 t_1 に雇用される労働量は、 $\frac{R+P}{\bar{w}}$ だけ期間 t_0 において雇用された労働量を、超過するであろう。期間 t_1 における雇用量を $\frac{W'}{\bar{w}}$ で示そう。なお、 W' は $W+R+P$ に等しいのである。この $\frac{W'}{\bar{w}}$ は、支配される労働で測って、 $\frac{W+R+P}{\bar{w}}$ をこえる価値をもつ産出高を産み出すであろう。その新しい価値を $\frac{W'+R'+P'}{\bar{w}}$ としよう。さらに、期間 t_2 においては、雇用される労働の総計は $\frac{W'+R'+P'}{\bar{w}} = \left(\frac{W''}{\bar{w}}\right)$ ということになるであろう。そしてそれは、それに先立つ期間において雇用された労働の総計よりも大きいのである。このようにして、その経済は連続的な成長プロセスをもつこととなるであろう、そして、その成長率は、各々の期間において産出高に体化された労働をこえるその産出高の「価値」の超過に依存するのである。¹⁷⁾

ところで、地主と資本家の所得のすべてが「貯蓄」されるという仮定は支持することはできない。すなわち、「怠け者がどこでも」その一部を消費するのである。そしてこのことがおこる程度だけ、成長の速度は遅らされるのである。たとえば、各々の期間における所得のある割合、 $(1-s)$ 、が浪費的な消費に支出され、割合 s が貯蓄されるとしよう。そのときには、ふたたび期間 t_0 から始めると、期間 t_0 において雇用される労働量は $\frac{W}{\bar{w}}$ であるが、期間 t_1 に雇用される労働量は $\frac{s \cdot W'}{\bar{w}}$ 、期間 t_2 ではそれは $\frac{s \cdot W''}{\bar{w}}$ 、等々といったこととなる。このような状況のもとでの成長率は s の値に依存することになるであろう。すなわち、 s の値が大きければ大きいほど、生産的に雇用される労働量が年々増加してゆく可能性がそれだけ大きくなるであろう。もし、 $\frac{s \cdot W'}{\bar{w}} > \frac{W}{\bar{w}}$ 、 $\frac{s \cdot W''}{\bar{w}} > \frac{s \cdot W'}{\bar{w}}$ 、等々であるな

らば、その経済はなお、正の成長率をもつであろう。他方、もし、 $\frac{W}{w} = \frac{s \cdot W'}{w} = \frac{s \cdot W''}{w} = \dots$ であるならば（我々のいまの仮定のもとではこのことも一つの可能性としてありうる）、そのときには、その経済はゼロの成長率をもつことになるであろう。また、もしも、資本家や地主が彼ら自身の収入を食いつぶしたうえに賃金にまで食い込み、それゆえそれにつづく各々の期間において生産的労働を雇用するための資力が低下する傾向にあるならば、その経済は負の成長率をもちさえるであろう。¹⁸⁾

以上が経済成長についてのスミスの図式の大まかなアウトラインである。スミスが交換価値という概念を利用するのは、主に、このコンテキストにおいてなのであり、そして、支配労働尺度の意義が存在するのはまさにここにおいてなのである。¹⁹⁾

＜補記 2＞

なお、ダース・グプタは、以上でみてきた1960年の論文に対して、1961年に、以下のような内容をもつ補遺を著わしている。

①どのようにスミスの支配労働価値尺度が彼の成長理論と関連づけられるかということを示そうという1960年の論文での試みにおいては、賃金率は生存費水準で一定であるという仮定をもうけた。この仮定は、スミスの人口理論に基づく彼の「長期的」賃金理論から演繹されることのできるであろうものである。だがスミスは、資本蓄積の結果として生じる賃金の上昇ということを考慮に入れる「短期的」賃金理論をも持っている。それによれば、もし蓄積が人口増加の速度よりも速く進行するならば賃金は上昇し、逆の場合には賃金は低下するのである。しかしながらスミスによれば、賃金の最低水準は、労働の維持費によって定められるのであり、そして、賃金がこの最低水準をこえて上昇するときにはいつでも労働者が増殖する傾向があるという理由のゆえに賃金はこの最低水準に向かう傾向があるのである。²⁰⁾

②だがたとえそうであっても、過渡的な諸期間のあいだにおいては、こ

の最低水準をこえての賃金の上昇ということは、考えられないことはない。それを阻止しようと試みる資本家たちの団結ということを加えてもそうである。蓄積は、資本家たちの団結力を弱めると考えられるのであり、そして蓄積は、過渡的には、賃金を高めうるのである。²¹⁾

③しかしながら、スミスの成長理論に関連づけられるものとしての1960年の論文で用いられた支配労働尺度のための公式は、このような過渡的な賃金変動という現象をも取り扱うことができるのである。²²⁾

- 1) A. K. Das Gupta, "Adam Smith on Value", *Indian Economic Review*, vol. 5 (no. 2, August 1960)—以下 Das Gupta [1960] と略記する—, p. 105.
- 2) Das Gupta [1960], p. 105. なお、ダース・グプタによれば、限界という概念もっていなかったためにスミスはこれら二つの概念の間の関係を理解することができなかったということはよく知られているけれども、スミスの論及の枠組みという観点からすれば限界効用という概念——新古典派の価値分析の基礎——はまったく筋違いのものであるように思える、とされる。Das Gupta [1960], pp. 105-106n. 2.
- 3) Das Gupta [1960], pp. 105-106, 108. なお、ダース・グプタは、このことに関してつぎのような説明をくわえている。それによれば、交換価値とは、単にひとつの比率を意味するのかもしれないし、あるいはまた、ひとつの絶対的な数量を意味するのかもしれない。その相違は重要である。もし我々が〔交換〕価値をひとつの比率と考えるならば、その尺度を採求するということは、明らかに当を得たことではない。Yに関してXの価値が上昇すれば、Xに関してYの価値が低下することになる。もしそのようなことがおこるとすれば、我々は、その交換比率がXに有利にそしてYに不利に変化しているということだけを知ることになっているのであり、そして、それで問題は終わるのである。我々は、いずれの商品からその変化が起こっているのかということを探ねないのである。我々の分析の観点からすれば、そのような研究は単によけいであるだけでない、すなわち、それは無意味なのである。なお、このような態度が、サミュエル・ベイリーのいわゆる相対主義的学説に導かれている「新古典派」の経済学者たちの価値分析を、特徴づけているのである。しかしながら、スミスがその問題を考察しようとしたその仕方は、このようなものではない。スミスによれば、価値とは、測定可能なものなのであり、それはたんなるひとつの比率というものではないのである。そして、彼が発見しようとする主な努力をかたむけているのは、これの尺度なのである。まさしく最初に、交換価値の概念を導入しつつ、スミスは、「諸商品の交換価値を規制する原理を究明するために、私はつとめて……この交換価値の真の尺度はなんであるか、すなわち、すべて

リアル・プライスの商品の真実価格はいったいなにに存するかということをも、明らかにしようと思う」と言っているのである。(Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited……by Edwin Cannan, with an Introduction by Max Lerner, The Modern Library <New York: Random House, 1937> —以下, *W. N.* と略記する—, p. 28. 大河内一男監訳『国富論』<全3巻>, 中央公論社, <I>, 1976年—以下, 大河内訳<I>と略記する, ただし, 本稿で引用する引用文の訳は必ずしもこの大河内訳と一致しない—50ページ。) Das Gupta [1960], pp. 105-106.

- 4) Das Gupta [1960], p. 106. ダース・グプタはつぎのようなスミスの文章を引用している。「したがって, およそ商品の価値は, それを所有していても自分では使用または消費しようとせず他の商品と交換しようと思っている人にとっては, その商品で彼が購買または支配できる労働の量に等しい。それゆえ, 労働はすべての商品の交換価値の真の尺度である。」(*W. N.*, p. 30. 大河内訳<I>, 52ページ。) Das Gupta [1960], p. 106.
- 5) Das Gupta [1960], p. 107.
- 6) Das Gupta [1960], p. 107. ダース・グプタは, Maurice Dobb, *Political Economy and Capitalism: Some Essays in Economic Tradition*, rev. 2nd ed. (London: Routledge & Kegan Paul, 1940), p. 13, とくに p. 13n. (岡稔訳『政治経済学と資本主義』<1950年のリプリント版の訳>, 岩波書店, <第1刷1952年>第12刷1966年, 12ページ, 12-13ページ注1), および, Joseph A. Schumpeter, *History of Economic Analysis*, edited from Manuscript by Elizabeth Boody Schumpeter (New York: Oxford University Press, 1954)—以下 Schumpeter [1954] と略記する—, p. 188n. (東畑精一訳『経済分析の歴史』<全7冊>, 岩波書店, 1955年-1962年, 第1分冊, 393-394ページ注20) を参照するよう指示している。Das Gupta [1960], p. 107n. 7.
- 7) Das Gupta [1960], pp. 107-108. このことについてのダース・グプタの説明をもう少し詳しく示せば, それはつぎのようなものである。すなわち, 「労苦と骨折り」というこの表現が現われる一節は, 支配労働尺度についての最初の明確な記述のすぐあとにつづくものであり, そしてそれはつぎのようなものである。「あらゆる物の真実価格, すなわち, どんな物でも人がそれを獲得しようとするにあたって本当に費やすものは, それを獲得するための労苦と骨折りである。あらゆる物が, それを獲得した人にとって, またそれを売りさばいたり他のなにかと交換したりしようと思う人にとって, 真にどれほどの値うちがあるかといえば, それによって彼自身はぶくことのできる労苦と骨折りであり, 換言すれば, それによって他の人々に課することができる労苦と骨折りである。」(*W. N.*, p. 30. 大河内訳<I>, 52-53ページ。) とここで, 『国富論』には, スミスが「真実価格」という言葉を価値と同義

語として使用しているということを示す証拠は豊富に存在するのであり、このことは、第1篇第5章のタイトルを見ただけでもわかる。真実価格は、そのタイトルが示しているように、貨幣での価格である「名目価格」とは別のものとしての、労働での価格なのである。したがって、「労苦と骨折り」は主観的なタームでの労働という概念を明瞭にするために使用された一つの表現にすぎないということは明らかである。1時間の労働において「たえ忍ばれる辛さ」や「用いられる創意」の程度の相違ということのゆえに、「人・時」(“man-hour”)というタームでの労働の単位の表示で満足せずに、スミスは、もう少し深く掘り下げ、そして、彼が労働の主観的な相対物とみなすものを持ち出すのである。その積極的な局面では、労働は、「労苦と骨折り」を伴い、その消極的な局面では、それは、「安楽、自由、幸福」の引き渡しを表わすのである。スミスの体系における価値分析の目的という観点からみてそのアプローチがいったい有益なものあるいは必要なものであると考えようとするか否かということは、別の問題である(ダース・グプタは、個人的にはそれは有益なものでも必要なものでもないと思う、とする)。いずれにしても、スミス自身は「労苦と骨折り」をもって価値についての一つの独立した説明としようとしたのではないということには、ほとんどどんな疑いもありえない。「労苦と骨折り」そのものは「支配労働」という基本的概念にとつての補助的なものであるということとは明らかであるように思える。

- 8) この転換原理についてのダース・グプタの説明はつぎのようなものである。それによれば、資本が蓄積されずまた土地が占有されていず、したがって労働が唯一の稀少な生産要素であるといった「初期未開の社会状態」という限定的なケースでは、商品の価値は、その商品の生産に使用される労働量によって直接的に測定されることができる。すなわち、この単純なケースでは、生産されるもののすべてが賃金として労働者に帰属することとなり、そして、市場においてその商品によって支配される労働はその商品に体化された労働に等しくなるのである。賃金が商品の販売から得られる唯一の所得形態であるかぎりでは、 $\frac{w}{p}$ はその商品によって支配される労働の量であり、そしてまたそれはその商品に体化された労働の量でもあるのである。「こうした事態にあっては、労働の全生産物は労働者に属する。そしてある商品の獲得または生産にふつう用いられる労働の量は、その商品がふつう購買し、支配し、またこれと交換されるべき労働の量を左右できる唯一の事情である。」(W. N., pp. 47-48. 大河内訳く | >, 82ページ。)(なお、ダース・グプタによれば、スミスが鹿とビーバーの交換の例を示しているのはこの脈絡においてなのであり、このいわゆる「初期未開の社会状態」においては商品の価値はその商品の生産に使用された労働量によって直接的に測定されることができ、そこでは、市場においてその商品によって支配される労働量とその商品に体化された労働量は等しくなるということとなるが、このケースについてのスミスの論述においては、「労働費用」

<labour cost> と「支配労働」<labour command> とは二つの独立したアプローチであるのではなく、一方つまり「労働費用」は地代も利潤も存在しない社会という特殊な状況での他方つまり「支配労働」からの派生物なのであり、したがって、交換価値は相対的労働費用によって決定されるという意味での労働価値説に類似したものに対してスミスが、直接的に、主唱者としての責任を有すると考えるのは誤っている、とされる。Das Gupta [1960], p. 108n. 8.) しかしながら、進歩した社会、つまり、資本が蓄積され土地が占有され、したがって、賃金のほかに他の要因が生産費に入ってくる進歩した社会では、いままでようには直接的に労働での価格を導き出すことはできない。商品に体化された労働は交換において支配される労働よりも少ないこととなる。いまや費用に計算されるべき他の要因は資本の使用にたいして支払われる利潤と土地の使用にたいして支払われる地代である。いまや、貨幣での価格は、賃金、利潤、地代からなる生産費に等しくなる傾向がある。だが、スミスはつぎのように述べる。「ここで注意しなければならないのは、価格のすべての異なる構成部分の真実価値は、そのおのおのが購買または支配しうる労働の量によってはかられる、ということである。労働は、価格のなかの労働〔賃金?〕に分かれる部分の価値だけでなく、地代に分かれる部分の価値および利潤に分かれる部分の価値をもはかるのである。」(W. N., p. 50. 大河内訳<I>, 85ページ。

[]内はダース・グプタ。このような複雑なケースでは、労働尺度は、商品の生産過程に支出される賃金、利潤、地代の総計から導き出されなければならないのである。転換の原理は単純なケースにおけるのと同じである。我々は、我々の公式の分子にさらに二つの変数すなわち地代と利潤を導入しなければならないだけである。かくして、商品によって支配される労働の計測は、 $\frac{(w+r+p)}{w}$ という公式から得られることとなる。これは、その商品からの販売売上金額(生産費に等しくなる)が市場において購買または支配しうる労働量を示すのである。Das Gupta [1960], pp. 108-109.

9) ダース・グプタは、つぎのようなスミスの文章を引用している。「文明国では、その交換価値が労働だけから生じるような商品はほんの少数であって、圧倒的大部分の商品の交換価値には、地代と利潤が大いに寄与している。だから、その国の労働の年々の生産物は、つねに、その生産物を産出し、調製し、市場に運ぶのに用いられた労働よりもはるかに多くの量の労働を、購買または支配するに足りるでおろす。」(W. N., p. 54. 大河内訳<I>, 92ページ。傍点の付されている箇所はダース・グプタがイタリック体にしてある箇所。) Das Gupta [1960], pp. 109-110.

10) Das Gupta [1960], pp. 109-110. またダース・グプタによれば、マルクスのアプローチはスミスのアプローチと根本的に異なりさえするけれども、このスミスの命題からマルクスの剰余価値概念への移行は容易なものであるように思える、とされる。すなわち、たとえば、 $\frac{(W+R+P)}{w}$ が純国民産出高を労働タームで測るもの

であるとすれば、 $\frac{W}{w}$ はマルクスの可変資本 (v) に対応するものとして、そして $\frac{(R+P)}{w}$ はマルクスの剰余価値 (s) に対応するものとして、示されうるのであり、ただしそのさいマルクスの不変資本 (c) は我々の純産出高外のものとして除外されている、というのである。Das Gupta [1960], p. 110n. 11.

- 11) Das Gupta [1960], pp. 105, 107-108, 110-111. なお、ダース・グプタは、スマイスが尺度を労働に見出したということに関連して、つぎのようなスマイスの文章を引用している。「それゆえ、労働が唯一の正確な価値尺度であることはもちろん、唯一の普遍的な価値尺度であること、いいかえると労働が、いついかなるところでも、さまざまな商品の価値を比較することのできる唯一の標準であることは明白であるように思われる。」(W.N., p. 36. 大河内訳<I>, 63ページ。) Das Gupta [1960], p. 110.

また、スマイスのいう「労苦と骨折り」とは「支配労働」尺度という考えにとつての補助的なものであるというダース・グプタの見解はすでにみたとおりであるが、スマイスの生産費アプローチに関しては、ダース・グプタは大旨つぎのような理解を示している。それによれば、スマイスの生産費アプローチは、ある限られた意味ではひとつの理論とみなされるけれども、ひとつの社会的象としての価値を説明するよう意図されてはいなかった。すなわち、多くの人々はこの生産費に関するスマイスの議論を、スマイスが与えた価値理論と考えようとしてきたし、また、たしかに、F.フォン・ウィーザーからJ.A.シュムペーターにいたるスマイスの諸解釈者たちの多くの人々がそうしたように、「生産費」にある独立的な地位を与え、そしてそれを、スマイスが「自然価格」とよぶものと結びつけてもよいかもしれない。しかしながら、生産費とは、ある限られたコンテキストにおいてのみ、つまり、費用の諸構成要素——賃金、地代および利潤——が独立的な既知のものとなされうるといったコンテキストにおいてのみ、価値を説明するものと考えられうるのである。ところで、スマイス自身はこのような限定的な範囲をこえてその「理論」の適用を拡大するつもりはなかったのではないかと思える。すなわち、スマイスがここで論及しているのは明らかに、まさしく一人の個別的な生産者あるいは一つの個別的な商品なのである。したがって、スマイスが商品市場および要素市場をつうじて作動する費用・価格均衡という現象に気づいていたということが認められうるとはいえ〔このことに関してダース・グプタはつぎのようなスマイスの文章を引用している。「それゆえ、自然価格というのは、いわば中心価格セントラル・プライスであって、そこに向けてすべての商品の価格がたえずひきつけられるものである。さまざまな偶然的な事情が、ときにはこれらの商品価格を中心価格以上に高くつり上げておくこともあるし、またときにはいくらかその下に押し下げることもあるだろうが、このような静止と持続の中心におちつくのを妨げる障害がなんであろうと、これらの価格はたえずこの中心に向かって動

くのである。」(W.N., p. 58. 大河内訳<I>99ページ。) Das Gupta [1960], p. 111n. 15.], その理論を、しばしばなされるように、一般均衡ということとその一部として包括するものとして解釈することは、いくぶん根拠のないことであろう。

「生産費」を、価値事象の説明への企てそれ自体——およそ価値「理論」とはそのようなものであるべきである——としてよりもそれ以上に、労働尺度にとって補助的なものつまり上でみたような意味で、労働尺度に到達するための一つの媒介物として、スミスの体系において役立っていると解釈することが可能なのである。『国富論』のなかの全価値分析における動機は、尺度の発見ということなのである。Das Gupta [1960], pp. 105, 110-111.

- 12) ダース・グプタはつぎのようなシュムペーターの文章を引用している。「アダム・スミス(第1篇第5章)は、市場において一商品の支配しうる労働の量が、貨幣で示されたその商品価格の最も有用な代用物であると考えている、すなわち彼は労働をニューメレールとして選んでいるのである。」(Schumpeter [1954], p. 310. 邦訳, 第2分冊, 650ページ。), および、「……彼〔アダム・スミス〕は、——レオン・ワルラスによって一般的に用いられるようにされた言葉に従うならば——ニューメレールとして、商品たる銀や商品たる金の代わりに、商品たる労働を選びだすのである。」(Schumpeter [1954], p. 188. 邦訳, 第1分冊, 392ページ。〔 〕内は中川。) Das Gupta [1960], p. 111.

- 13) このことについてダース・グプタは大旨つぎのような説明をなしている。それによれば、スミスとワルラスの両者がある共通標準に言及しており、そして彼らはともに彼らの標準を価格の分析のコンテキストにおいて使用しているということは真実である。それでもスミスの労働尺度とワルラスのニューメレールの類似は表面的なものにすぎない。スミスの労働尺度とワルラスのニューメレールは、同一の含意も同一種類の意義も持っていないのである。ワルラスの体系におけるニューメレールという概念は、まさしく、交換の一般均衡のコンテキストでの諸価格の体系における決定性を説明する一つの考案物である。この目的のためには、交換の範囲内にあるどんな商品も (x, y, \dots, n) ニューメレールとして選択されえた、すなわち、選ばれた商品が一貫して適用されさえすれば、選ばれた商品それ自体に付されるべき特別な属性はなにも存在しないのである。これに対し、スミスの標準は経時的に不変なものでなければならない。それは、異なる諸時点での諸価値を比較するために使用されるべき「測定物差し」なのである。スミスが標準たるものに必要な属性を有する「商品」として、穀物あるいは金あるいはまた銀を退けて労働を選んでいる、ということが、思い起こされるであろう。他の諸商品は経時的に価値において変化する、それに対し、労働はそうでないのである〔ダース・グプタはつぎのようなスミスの文章を引用している。「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものということができよう。」(W.N., p. 33. 大河内訳

< [>, 57ページ。傍点の付されている箇所はダース・グプタがイタリック体にしてある箇所。) Das Gupta [1960], p. 112n. 21.]. ワルラスのニューメレールとスミスの労働尺度という二つの概念は、根本的に、異なった論考プランに属しているのである。このことを理解しないと『国富論』における価値分析の意味を全く見のがしてしまうこととなる。Das Gupta [1960], pp. 111-112.

- 14) なお、すでにみたようにダース・グプタは『国富論』での価値分析におけるスミスの主要な関心事は価値尺度の発見ということであったとするのであるが、ダース・グプタは、そのようなものとしての『国富論』における価値分析の意義はどこに存するのか、また、どのように「価値」は『国富論』の主要構造に関連づけられるのか、ということについて、大旨以下のような説明を示している。それによれば、いわゆる新古典派体系にあっては価値理論が経済分析の核心を構成するのであり、そしてこの学派に属する経済学者たちにとっては、経済学の問題は、本質的には、稀少資源の配分の問題、すなわち、その割合で稀少資源の投入が競争的な諸産業のあいだに配分される傾向のあるそのような配分割合を規制する諸力の本質を確定するという問題である。そして、いやしくも合理的な社会においてはこの資源配分は市場をつうじてはたらく「相対価格」によって導かれるということから、市場と価格の原理が、これらの経済学者にとっては、経済学の中心部分として現われてくることとなる。それにたいして、スミスの体系において中心的な地位を占めるものは、まさしく、諸国民の繁栄の前進と衰退の諸原因および諸含意についての分析ということである。「配分」がなんの役割も果たさないというわけではない、それはたしかに役割を果たすのである、しかしその地位は従属的なものである。つまり、配分の問題は、主に、相対的な有利性にもとづく適切な「資本の投下」が諸国民の富を増加させるといふかぎりにおいてのみ、関連しているのである。『国富論』の中心的な諸陳述は、現在我々が成長の経済学として理解しているものと関連する。それゆえ人は一体なぜスミスがそれほど多くの重要性を価値に置いたのかということをお不思議に思うかもしれない。スミスが『国富論』をつうじて言っていること、つまり、富は分業の進展とともに増加するという、分業は市場の拡大によって促進されるということ、資本の蓄積は物的繁栄の条件であるということ、資本蓄積は貯蓄の結果であるということ、このようなことを言うためには、人は、価値についての込み入った理論を必要とはしない。『国富論』は本質的には成長の経済学におけるひとつの試みである、そして、たしかに成長モデルは、ポスト・ケインズ成長論者たちのあいだの慣行が十分に例証しているように、相対価格理論の助けなしに展開させられたのである (なお、ダース・グプタは、ここでの問題とは別のこととしながらも、個人的には、このような慣行は好ましいものとは思えず、成長理論が相対価格理論と統合されることが望ましいと思える、としている。Das Gupta [1960], p. 113n. 25.)。だがそれでも、異時点間の比較のために、富を構成

する異質的な諸財貨がある共通の標準のタームで言い直すためにだけでも、理論の展開の一つの段階で、価値という概念が導入されなければならない。この問題は集計に関する問題、つまり、国民所得を測定するための方法を工夫する問題である。現代の理論家たちなら、「指数」としてこんにち知られているものの助けをかりて、その問題を解こうとするであろう。それにたいし、スミスは労働尺度の助けを援用するのである。その目的は、産出高の総「価値」の変動というタームで、時間をつうじて一社会内にどのような道すじで進歩が生じているか、ということを示すことである〔なお、ダース・グプタは、スミスが『国富論』において「真実価格」という概念の意味に言及しつつ「本書のような著作で……ある特定の商品の、さまざまな時と所におけるさまざまな真実価値を比較すること、いかえると、ある特定の商品が、さまざまな場合にそれを所有する人たちに与える、他の人々の労働を支配する力のさまざまな程度の違いを比較することは、ときには有用なことであろう」と述べている (W. N., p. 38. 大河内訳< I >, 65ページ。傍点の付されている箇所はダース・グプタがイタリック体にしてある箇所。)、ということを指摘し、そして、ふたたびスミスの価値尺度とワルラスのニュメレールとのあいだのきわだった相違に注意するよう指示している。Das Gupta [1960], p. 113, p. 113n. 26.]。このような意味で、支配労働価値尺度は、スミスの体系においては、経済的变化のプロセスについてのひとつの理解への鍵を提供するのである。Das Gupta [1960], pp. 112-115.

- 15) この脈絡でダース・グプタはつぎのようなスミスの文章を引用している。「もしこの社会が年々に購買できるはずの労働のすべてを年々用いるとすれば、労働の量は年ごとに大きく増大するだろうから、すべてあとの年の生産物は前の年のそれにくらべて、非常に大きい価値をもつことになるだろう。だが、年々の生産物の全体が勤勉な人々を扶養するために用いられる国などというものはどこにもない。怠け者がどこでもその一大部分を消費するものである。この全生産物がそうした二つの異なる階級の人々のあいだに年々分割される割合が異なるのにおうじて、その通常価値または平均価値は、年々増加するか減少するか、それとも年から年へとひきつづき同じであるか、そのいずれかになるにちがいない。」(W. N., p. 54. 大河内訳< I >, 92ページ。) Das Gupta [1960], p. 114.
- 16) なお、ダース・グプタによれば、このことは、スミスが述べている人口増加の原理から出てくる、とされる。Das Gupta [1960], p. 114n. 28.
- 17) Das Gupta [1960], pp. 114-115. なお、ダース・グプタは、消費において1期間のラグが仮定されていることに注意するよう指示している。Das Gupta [1960], p. 115n. 30.
- 18) Das Gupta [1960], p. 115. なお、ダース・グプタはここでまた、スミスの体系とマルクスの体系との類似を指摘している。そして、ここで言及されている成長率

ゼロという中間的なケースはマルクスの単純再生産のケースに相当し、それに対して正の成長率というケースは拡大再生産のケースに相当するのであり、一方においては剰余価値のすべてが「消費」され、他方においては、剰余価値の一部が可変資本に転化されるのである、とされる。Das Gupta [1960], p. 115n. 31.

19) Das Gupta [1960], p. 115.

20) A. K. Das Gupta, "Adam Smith on Value: A Postscript", *Indian Economic Review*, vol. 5 (no. 3, February 1961) —以下 Das Gupta [1961] と略記する—, p. 285. なお、ダース・グプタは、つぎのようなスミスの文章を引用している。「あらゆる種類の動物は、その生活資料に比例して自然に増殖する。そして、どんな種類の動物も、これを超えて増殖することはできない。」(W. N., p. 79. 大河内訳<I>, 135ページ。)また、「もしも、[労働にたいする] こうした需要がたえず増加するならば、労働の報酬は必然的に労働者の結婚と増殖を刺激して、たえず増大する需要を、たえず増大する人口によって満たすことができるようになるにちがいない。」(W. N., p. 80. 大河内訳<I>, 136ページ。[]内はダース・グプタ。) Das Gupta [1961], p. 285.

21) Das Gupta [1961], pp. 285-286. なお、ダース・グプタはつぎのようなスミスの文章を引用している。「賃金を騰貴させる資本^{ストック}の増加は、利潤を引き下げる傾向がある。多数の富裕な商人^{ストック}の資本が同一事業にふりむけられるとき、かれら相互の競争は自然にその利潤を引き下げる傾向がある。また、同じ社会で営まれる種々さまざまな職業において、同じような資本^{ストック}の増加があるときは、同じ競争がこれらすべての事業で同じ効果をもたらすにちがいない。」(W. N., p. 87. 大河内訳<I>, 148ページ。) Das Gupta [1961], pp. 285-286. ただし、ダース・グプタは、利潤低下に関するスミスのこの命題は低落的利潤についてのリカードウ理論と区別されなければならない、とする。そのことについてのダース・グプタの説明はつぎのようなものである。すなわち、リカードウの理論では、低落的利潤という傾向は、収穫逓減のために存続するのである。つまり、蓄積は、ある所与の量の土地での資本と労働の使用の増大へと導き、収穫逓減が作用し、そして、生存手段を生産するための労働費用が上昇する、したがって、労働のタームで測られた賃金は上昇しそして利潤は低下する。そしてそのプロセスは、技術進歩が存在しない場合には、蓄積が止まりそして定常状態が到達されるほどの低水準にまで利潤が低落するまで、続くのである。これに対して、スミスの体系においては、停滞に向かうこのような長期的傾向といったものは作用しはしない。そこでは、収穫逓減が占めるべき場所はないのである。蓄積は終わることなく、それはただ、人口増加と調整されるだけなのである。賃金の上昇と利潤の低下は、経済成長率に影響を及ぼす過渡的な現象なのである。Das Gupta [1961], p. 286.

22) ダース・グプタは、1960年の彼の論文で用いられた支配労働尺度のための公式に

よってどのようにしてこの過渡的な賃金変動という現象が取り扱われうるかということを示すことが、この補遺の目的である、としている。(Das Gupta [1961], p. 286.) そしてその説明は以下のようなものであるといえる。

支配労働尺度のための公式は、 $\frac{W+R+P}{\bar{w}}$ あるいは $\frac{W}{\bar{w}} + \frac{R+P}{\bar{w}}$ で、 \bar{w} は賃金率、 W は総賃金、 R は総地代、 P は総利潤であった。 $\frac{W}{\bar{w}}$ はある所与の期間のあいだに総産出高に「体化」された労働量であるため、「支配される労働」は、 $\frac{R+P}{\bar{w}}$ だけ「体化された労働」を超過する。したがってこの $\frac{R+P}{\bar{w}}$ は、次の期間に〔追加的に〕生産的に使用されうる労働の最大量を表わす、すなわちそれは、最大蓄積率を与えるのである。この最大量に注意を集中し、その一部分が「浪費的な消費」に支出されるという可能性を無視しよう。ある部分がそのように支出されるかもしれないという事実は、ここでの分析の妥当性には影響を及ぼさないのである。(Das Gupta [1961], p. 286.)

さて、もしも、最低生存費の賃金率のもとで、人口増加の結果として生じる労働力の増加が蓄積のペースと調子を合わせつづけるならば、賃金率は最低生存費水準で一定でありつづける。だが、うえて過渡的な期間とよんだものを考慮するために、労働力の増加が、資本家たちがすすんで生産的に雇用しようとする追加的な労働の量よりも少ない、と仮定しよう。そのときにはどのようなことが生じるであろうか。明らかに、労働市場に圧力が存在し、そして賃金が上昇する、つまり \bar{w} はより大きい値をとる。ところでこのことは、公式の第二項すなわち $\frac{R+P}{\bar{w}}$ に影響を及ぼすのであり、それゆえ、成長のプロセスはここでは、もし賃金が生存費水準で一定にとどまっていたならばそうであったであろうものとは異なったものになる傾向がある。(Das Gupta [1961], pp. 286-287.)

産出高が $W+R+P$ で、体化された労働が $\frac{W}{\bar{w}}$ 、そして支配される労働が $\frac{W+R+P}{\bar{w}}$ であるといった期間 t_0 からはじめよう。そのときには、期間 t_1 のための生産的雇用に意図される追加的労働（すなわち、蓄積）は、 $\frac{R+P}{\bar{w}}$ である。しかしながら、もしも、期間 t_1 のあいだに人口増加の結果としてそのシステムに実際にくわわる追加的な労働がこれよりも少ないならば、賃金は生存費水準にとどまることはできない。期間 t_1 についての新しい賃金率、それを \bar{w}' で表わせば、その \bar{w}' は \bar{w} よりも高いであろう、したがってまた、 $\frac{R'+P'}{\bar{w}'}$ は、もし賃金率が生存費水準で一定にとどまっていたならばそうであったろうものよりも、小さいであろう。言い換えれば、期間 t_1 のあいだの「体化された労働」をこえての「支配される労働」の超過分は、変更された賃金率 \bar{w}' のもとでは、生存費水準の賃金率 \bar{w} のもとではそうであったろうよりも、より少ないことになるであろう。そしてそのことは、労働のタームで測られた利潤〔および地代〕も、また同様に蓄積の余地

も、[生存費水準の賃金率のもとではそうであったろうよりも、] ヨリ少ないこととなるであろうということを、意味しているのである。(Das Gupta [1961], p. 287.)

ところで、このようなプロセスは、人口増加が蓄積の速度に遅れるかぎり、続くであろう。しかしながら、それは、無際限には続くことはできない。というのは、一方で、賃金が上昇してゆくのであったのであるから、「体化された労働」をこえての「支配される労働」の超過は(すなわち蓄積の速度は)、「賃金上昇がなかった場合にくらべて、] ひきつづく諸期間において低下しつつあることになるであろうし、また他方で、そしてまたこれがスミスの人口理論がとることになる立場でもあるのであるが、賃金率の上昇は結婚と増殖を刺激するであろう、そしてそのため人口増加の速度は[賃金上昇がなかった場合にくらべて、] 上昇しつつあることになるであろう、からである。その結果、ある段階で状況は逆転されそして人口増加が蓄積の速度を超える傾向をもつこととなるであろう。この逆転的な作用は、うえとは逆に、賃金の低下、[労働のタームで測られた]利潤[および地代]の上昇の傾向をもたらすであろう、そしてそのプロセスは、結局、生存費に等しい賃金率ということと両立するであろうような人口増加と蓄積率との間の調整ということで終わるのである。これらの端点が、1960年の論文での準拠枠であったのである。(Das Gupta [1961], p. 287.)

結びに代えて

以上、「アダム・スミスの価値尺度論」に関係する1960年および1961年に発表されたA.K.ダース・グプタの所論をみてきた。

以下では、その所論の特徴等に関して、若干の点を示しておくこととする。

まず、ダース・グプタによれば、スミスは「効用」を表わすものとしての「使用価値」と、「交換価値」という二つの価値概念があるとし、彼はそのうちの「交換価値」を取り扱ったのであるが、彼の議論においてはこの「交換価値」はたんなる比率といったものではなくて測定可能な数量であったのであり、彼は商品の交換価値をその商品を所有することがもたらす他の財貨に対する購買力と定義し、そして、商品のこの交換価値をまた一社会において年々に生産される全体としての諸商品のもつ交換価値およびその経時的な変動を測定するためのそれ自体不変な共通の標準を、「支

配労働」に求め、商品の交換価値また全体としての諸商品のもつ交換価値は、それらによって支配される労働量によって測定されるとした、とされるのであった。

また、ダース・グプタによれば、価値に関する議論におけるスミスの主要な関心は価値尺度を見出すことに、すなわち、商品の価値の尺度を発見しましたそれからすんで諸国民の富の尺度を発見することにあつたのであつて、価値を説明するものとしての一般的な価値理論を提示することにあつたのではなく、価値についての他の諸概念は付随的なもの、補助的なものにすぎないのであつて、それらの概念の意義は、尺度という主要問題との関連でみられるべきである、とされるのであつた。

そしてさらに、『国富論』における中心的な問題を経済成長の問題ととらえるダース・グプタは、スミスの支配労働価値尺度がスミスの成長理論とどのように関連づけられるかということを示しそしてそのコンテキストにおけるスミスの支配労働価値尺度のもつ意義を示そうとするのであつた。

そしてまた、ダース・グプタは、1961年の補遺において、スミスの議論における過渡的な賃金変動の可能性ということを認め、そのような変動が生じるケースをも取り扱うために、上述の1960年の論文での議論を拡張するのであつた。